農 業 技 術 情 報

令和6年7月17日
ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所　015-572-3128
ＪＡ幕別町　0155- 54-4118
ＪＡ札内　56-2131
ＪＡ帯広大正　64-4591
日甜幕別原料事務所　54-2756
幕別町農林課　54-6605

★各作物の生育・作業の遅速（幕別町：7 月 15 日現在）　　（ ）内は平年値

作物名	遅速日数	生育および作業状況	生育期節
秋まき小麦	早７	稈長 87.8(79.6)cm 穂長 9.7(8.6)cm 穂数 637(648)本/㎡	成熟期 7/13 (7/20)
春まき小麦 （はるきらり）	早５	稈長 82.5(85.7)cm 穂長 7.2(7.3)cm 穂数 537(773)本/㎡	乳熟期 7/4 (7/7) 成熟期 (7/30)
馬鈴しょ	早２	茎長 67.1(71.3)cm　茎数 3.2(3.8)本	終花期 7/17 (7/19)
大　豆	早８	茎長 44.6(47.3)cm　葉数 7.1(6.5)枚	開花始 7/10 (7/18) 開花期 7/12 (7/20)
小　豆	±０	茎長 18.4(15.9)cm　葉数 5.8(5.8)枚	
菜豆（金時）	早２	茎長 26.7(42.9)cm　葉数 3.9(4.0)枚	開花始 7/8 (7/10) 開花期 7/10 (7/12)
てん菜（移植）	早４	草丈 56.1(61.4)cm　葉数 25.3(23.5)枚 根周 28.8(26.1)cm	
てん菜（直播）	早５	草丈 60.5(45.5)cm　葉数 20.6(16.6)枚 根周 19.9(15.5)cm	
牧　草	早１	草丈 36.4(35.3)cm １番収穫期 6/18(6/22) 収穫終 7/5 (7/12)	
飼料用とうもろこし	早４	草丈 176.0(157.9)cm　葉数 14.2(14.0)枚	
たまねぎ	早１	草丈 73.9 cm(81.2)cm 生葉数 9.1(9.0)枚　葉鞘径 19.1(21.4)mm 球径 3.9(3.9)cm	球肥大始 7/11(7/12) 球肥大期 7/15(7/16)

畑　作

薬剤使用にあたっては、各部会や販売先等の基準に従ってください。
薬量および倍率は基準内に抑え、薬害やドリフトには十分注意してください。

＜ 麦 類 ＞

「きたほなみ」の成熟期は平年比で7日早く迎え、収穫作業が始まったところです。「はるきらり」は平年より9日程度早く成熟期を予想しています。収穫後のほ場管理を適切に行ないましょう。

1 収穫後の管理

(1)麦稈の処理

ア　収穫後の麦稈は速やかに搬出しましょう。

イ　特に、立枯病など土壌病害が発生したほ場では、病気のまん延を防ぐため、麦稈をすき込まずに持ち出し、堆肥化しましょう。また、２～３年は麦の作付けを避けまし

ょう。

ウ　麦稈をすき込む場合は、窒素流亡による環境負荷を低減するため、後作に作物や緑肥を栽培する場合を除き、窒素肥料の施用を避けましょう。

エ　そば･麦異品種の後作に麦の作付は避けてください。やむを得ず作付けする場合は、麦稈を搬出しロータリーをかけ、出芽した後に、プラウで埋設して下さい。

(2)多年生雑草対策

シバムギ・レッドトップ・ギシギシなど多年生雑草が多い小麦畑が散見されます。多年生雑草対策には耕起前の除草剤茎葉処理が有効です。

【多年生雑草の処理方法（グリホサート系除草剤）】

小麦収穫 → 雑草が 15cm 以上に再生 → 除草剤散布 → 耕起

※少水量散布時は専用ノズルを使用する。

※通常２～７日で効果が発現し、効果完成までさらに日数を要します。

表１　耕起前の除草剤例

農薬名	処理方法・使用時期	薬量 (ml/10a)	回数	注意事項
ラウンドアップ マックスロード	耕起前・雑草生育期 水量 25～100ℓ	200～500	３回	・多年生雑草が 15cm 以上再生後に散布。 ・展着剤を加用しない。 ・散布後 6 時間は降雨がない日に散布。（ラウンドアップマックスロードは１時間、タッチダウン iQ は３時間） ・周辺作物に飛散しないよう注意するとともにドリフト低減ノズルの使用が望ましい。 ・少水量散布は専用ノズルを使用。
タッチダウン ｉ Ｑ	通常散布、耕起 3 日以前（雑草生育期） 少水量散布（水量 25～50ℓ ）耕起３日以前（雑草生育期）	500～750	１回	
サンダーボルト 007	耕起前（雑草生育期）	500～1,000	２回	
クサトリキング	耕起前まで 雑草生育期草丈 30cm まで	250～500	３回	

(3)収穫跡地の緑肥作付

地力の維持増進のため、小麦収穫跡地には緑肥作物を作付けしましょう。後作にながいも・ごぼうなどを作付けする場合は、キタネグサレセンチュウ対策のため、えん麦野生種が有効です。えん麦野生種には、ばれいしょのそうか病軽減効果や小豆落葉病の抑制効果もあります。表２を参考に、ほ場の条件に応じた緑肥を選定しましょう。

表２　小麦後作緑肥の栽培例（北海道緑肥作物等栽培指針）

緑肥作物名	は種時期	は種量 (kg/10a)	施肥量(kg/10a)			すき込み時期
			窒素	リン酸	カリ	
えん麦（一般）	８月上～中旬	15～20	４～６	５～10	０～５	10 月中旬～10 月下旬
えん麦野生種（ヘイオーツ、サイアー）		10～20	５	５	０～５	
シロカラシ類(キカラシ)※1、2	８月上～下旬	２	５～８	５～10	０～７	
ひまわり(りん蔵) ※２	８月上～下旬	1.5～２	４～６	８～10	０～10	

※１・そうか病発生ほ場では前作として用いない。

・根こぶ病発生の恐れがあるので、前作又は後作にアブラナ科野菜の作付けはしない。

※２・キタネコブセンチュウやキタネグサレセンチュウの密度を高めるので、後作物の選定に注意する。

（4）R5年に発生した（通称）「えん麦いもち病」について

昨年、町内で確認された「えん麦いもち病（正式名称：セイヨウチャヒキのいもち病）」は、高温・多湿条件下で発病のリスクが高くなるので、そのような気象条件が続いた場合は今年も発生する恐れがあります（R6．5月は種の額縁栽培えん麦野生種ではR6．6月末現在、本病の発生は確認されていません）。

・えん麦野生種（ヘイオーツ・サイアーなど）の方が、一般のえん麦より弱くいもち病にかかりやすいです。昨年も、一般えん麦ではほとんど病斑はみられませんでした。このことから、根物野菜に対するセンチュウ抑制効果などえん麦野生種が必要な場合を除き、一般えん麦を選択した方がいもち病のリスクは低いといえます（表3）。

・昨年の発生状況では、は種の早いほ場が遅いほ場より発病程度が大きい傾向がみられました。このことから、高温・多湿条件の不良環境に多く遭遇した方が発病リスクが大きいと考えられます。

・これらより、えん麦野生種を栽培する場合、収量は低下しますが8月下旬～9月上旬頃の遅いは種の方がえん麦いもち病に対するリスクは小さいといえます。なおその際、センチュウ抑制効果を維持するため、は種量を多め（20kg/10a）にすることが有効です。

表３　緑肥作物の種類と効果（小麦収穫後の後作緑肥を想定）

作物名		効果												
		有機物の補給	空中窒素の固定	窒素効果	物理性の改善	排水性の改善	生物性の改善						土壌浸食防止効果	養分流亡防止効果
							センチュウ				菌根菌	雑草抑制効果		
							ｷﾀﾈｸﾞｻﾚ	ｷﾀﾈｺﾌﾞ	ｻﾂﾏｲﾓﾈｺﾌﾞ	ﾀﾞｲｽﾞｼｽﾄ				
イネ科	えん麦	◎		○	○		×	◎	×		○	○	○	○
	えん麦野生種	◎		○	○		◎	◎	○		○	○	○	○
マメ科	ﾍｱﾘｰﾍﾞｯﾁ	○	◎	◎			×	×	×	○	◎	◎	○	
ｱﾌﾞﾗﾅ科	シロカラシ	○		○	○		×	×	×				○	○

平成16年北海道緑肥作物等栽培利用指針（改定版）より抜粋

＜ばれいしょ＞

1　疫病の防除について

高温多湿になると夏疫病の発生も懸念されます。また、塊茎の肥大が始まっていますので、今後は薬剤毎の登録有無も考慮し引き続きローテーション防除を行いましょう。

表４　疫病の防除薬剤例

農薬名	RACコード	使用倍率	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）	効果の発現	対象病害（倍）		
						夏疫病	菌核病	塊茎腐敗
ホライズンDF	27、11	1,000～2,500倍	14日	4回	予防・治療	1,500	－	－
プロポーズ顆粒水和剤	40、M5	750～1,000倍	7日	5回	予防・治療	1,000	－	750～1,000
エキナイン顆粒水和剤	27、40	2,000～3,000倍	7日	4回	予防・治療	－	－	－
フロンサイドSC	29	1,000～2,000倍	7日	4回	予防	2,000	1,000	1,000
ランマンフロアブル	21	1,000～2,000倍	7日	4回	予防	－	－	1,500
レーバスフロアブル	40	1,500倍	7日	2回	予防・治療	－	－	1,500

2 軟腐病の防除

高温多湿条件が続き軟腐病が発生しやすい環境にあるため注意しましょう。「6月13日付技術情報」および「令和6年度農作物病害虫防除基準」参照の上、初期防除を徹底しましょう。また、生育量に応じて水量を調節しましょう。

3 アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウ等防除

発生ほ場がみられます。害虫の発生状況に応じて防除を実施して下さい。
＊薬剤の使用例は「６月１３日付技術情報」を参照

＜豆類＞

1 大豆のべと病防除

「トヨムスメ」、「音更大袖」、「黒大豆」はべと病抵抗性がないため、特に発生状況に注意し防除を実施してください。その他の品種についても要防除水準に達した場合は防除が必要です。開花始に上位葉を確認し、適正に防除をしましょう。

べと病の要防除水準

開花始の上位葉の病斑面積率２．５％以上（病斑個数３０個/葉、葉全体に病斑）

防除時期の目安

開花２～３週間前に要防除水準に達した場合

⇒ 要防除水準に達した時期とその２～３週間後の２回防除。

開花始に要防除水準に達していない場合

⇒ 開花期１回防除が必要（黒大豆）、防除不要（トヨムスメ・音更大袖）

表５　大豆べと病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）
プロポーズ顆粒水和剤	40、M５	1,000	21日	２回

2 大豆の菌核病防除

開花始後 10～15 日目に第１回散布をし、２回目以降は発生状況に応じて 10 日毎に防除しましょう。

表６　大豆菌核病の防除薬剤例

薬剤名	RAC コード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）	備考
トップジンM水和剤	1	700～1,000	14 日	4回	紫斑病に 1000 倍で登録あり
プライア水和剤	10,1	1,000	14 日	4回	紫斑病・灰色かび病・炭そ病にも登録あり

3 マメシンクイガ・カメムシの防除（大豆）

１回目防除の目安は、①成虫初発と②莢伸長始（およそ半分の株に2～3㎝の莢が認められた日）両方が確認されたら、その６日後頃です。莢伸長始を観察し適期に防除しましょう。２回目防除は１回目の７～10 日後に防除します。カメムシとの同時防除が可能です（表７）。

表７　マメシンクイガ・カメムシの防除体系例

回目	目安月日	農薬名	RAC コード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）
①	8月上旬	ゲットアウトWDG	3A	3,000	7日	3回
②	①の10 日後	スミチオン乳剤	1B	1,000	21 日	4回

※甲虫類（コガネムシ等）の食害が目立つ場合は、有機リン剤（スミチオン乳剤）を使用しましょう。

※１回目または２回目にピレスロイド系薬剤（RAC コード：３A）を散布するのが効果的です。

4 小豆・菜豆の病害虫防除

（1）炭そ病の防除（小豆・菜豆）

７月からの多雨・多湿時に発病が多くなります。ほ場を良く観察し、発生初期から防除に努めましょう（表８）。 ※「雪手亡」「絹てぼう」は抵抗性があるため防除不要

（2）菌核病、灰色かび病の防除（小豆・菜豆）

開花後に曇雨天が続くと発病しやすくなります。ほ場の生育に合わせて、適期防除に努めてください。

◎ 小豆防除適期　１回目：開花始後７～10 日目　　２回目：１回目防除の 10 日後

◎ 菜豆防除適期　１回目：開花始後５～７日目　　２回目：１回目防除の 10 日後

表８　小豆・菜豆　菌核病、灰色かび病を中心とした防除例

回数	薬剤名	RACコード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）	炭そ病
１回目	ミギワ10フロアブル	52	1,000	７日	３回	○
２回目	パレード20フロアブル	7	2000～4000	前日	３回	×
３回目	ファンタジスタ顆粒水和剤	11	2,000	７日	３回	○

※菜豆類は病害の発生が多い場合、3回目を検討する

（3）アブラムシ類・アズキノメイガ・ダニ防除（小豆）

マメアブラムシの発生が確認されています。発生状況に応じて防除してください。アズキノメイガは開花始の７～10 日後に薬剤散布を行ってください。

表9　小豆のアブラムシ類・アズキノメイガ・ダニ防除薬剤例

薬剤名	RAC コード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）	アブラムシ類	アズキノメイガ	ナミハダニ	カメムシ
モスピランＳＬ液剤	４A	2,000～4,000	14日	３回	○	○ 2,000倍		
ゲットアウトＷＤＧ	３A	3,000	７日	３回	○	○		
ペイオフＭＥ液剤	３A	2,000	７日	３回	○	○		
スミチオン乳剤	１B	1,000	21日	４回	○	○		○
フェニックス顆粒水和剤	28	2,000～6,000	７日	２回		○		
カスケード乳剤	15	4,000	７日	２回		○	○	
トクチオン乳剤	１B	1,000	３０日	２回		○	○	

※「アドマイヤー顆粒水和剤」は豆類（種実）での登録が削除となりましたのでご注意ください（大豆・菜豆含む）。

＜てんさい＞

褐斑病の初発およびヨトウガの食害が確認されています。ほ場を良く観察し適期防除に努めてください。また根腐病・葉腐病も発生しやすい気象条件となっています。

1　褐斑病の防除

積算気温が高く褐斑病の多発しやすい天候が続いておりますので、以下の薬剤を参考に水量は120ﾘｯﾄﾙ/10a で散布してください。

表10　褐斑病防除例

防除時期	農薬名	RAC コード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	回数（以内）
７月下旬	グットクル水和剤	3 M3	500	21 日	2回
８月上旬	カッパーシン水和剤 又は カスミンボルドー	24 M1	800	７日	5回

2　アブラムシ・ヨトウガの防除

下記の通り防除してください。また、RAC コード別系統剤による輪番防除を実施し、連用とならないよう予防防除を実施しましょう。また８月中旬以降の発生状況により薬剤処理回数の削減を検討しましょう。

表11　害虫防除例

防除時期	対象害虫	農薬名	RAC コード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	回数（以内）
８月上旬	ヨトウガ	カスケード乳剤	１５	4,000	７日	4回

※カスケード乳剤は、ハダニ・アシグロハモグリバエ・シロオビノメイガにも効果があります。

3 葉腐病(根腐病)の防除

葉腐病は高温多湿条件で多発します。発生が見られたら直ちに防除を行ってください。根腐病も同じ病原菌ですので、発生に注意しましょう。

表12 葉腐病の防除薬剤例

農　薬　名	RAC コード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）
ミリオネアフロアブル	7	4,000	7日	4回

野　菜

薬剤使用にあたっては、各部会や販売先等の基準に従ってください。
薬量および倍率は基準内に抑え、薬害やドリフトには十分注意してください。

＜ながいも＞

(1) 分肥

分肥を行う場合は、遅くても7月下旬までに実施してください。また、過剰な分肥や多肥ほ場における分肥は、黄変期の遅れによる乾物率低下の原因になるため、適正範囲内で実施してください。

(2) とかち太郎の追肥判断（令和4年度指導参考）

とかち太郎はいもの肥大が収穫まで継続し、多雨条件において尻割れが発生しやすいことから以下の基準を追肥の参考としてください。

追肥実施の目安は6～7月の降水量が230mm以上かつ7月末までの総窒素施肥量20kg/10a以内のときに8月上旬までに5kg/10a程度で実施してください。20kg/10aを超えている場合でも、8月上旬に土壌診断(EC)を測定し、EC:0.15mS/cm以下であれば8月上旬に窒素5kg/10a程度を追肥します。

6月～7月16日現在における積算降水量は73.6mm（糠内アメダス）となっており、追肥を実施する降水レベルには至っていません。ただし、肥料の流亡が心配される場合は、土壌ECの測定を受け付けておりますので、普及センターまでお問い合わせください（TEL:015-572-3128）。

「分肥と追肥の違い」
分肥:基肥後の計画的な施肥
　例～窒素 20kg/10a の施肥の場合（基肥 15kg/10a＋分肥 5kg/10a）
追肥:肥料流亡等に伴う臨時的な施肥
　例～計画では窒素 20kg/10a の施肥だったが、流亡を考え新たに 5kg/10a の施肥を行う。

＜その他病害虫情報＞

＜たまねぎ＞

白斑葉枯病・リン片腐敗病・軟腐病が発生しています。ネギアザミウマの発生も急激に増えてきました。引き続きローテーション防除を実施してください。

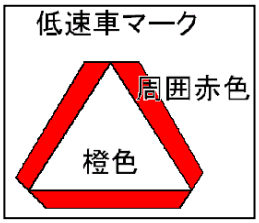
＜レタス＞

アザミウマ類の発生が多くなっています。

＜アブラナ科野菜＞
コナガの発生が多くなっています。引き続き複数系統の薬剤を用いたローテーション防除を実施してください。

～農薬の安全使用と農作業事故防止～

★農薬散布において、「農薬の安全使用基準」を遵守し、散布の高さを低くし周辺作物への飛散防止に努めましょう。
★散布時は、必ず防除用マスクを身に付け、肌をしっかり覆うようにしましょう。
散布が終わったら肌の露出部を良く洗い、うがいをしましょう。

★トラクタ発進・PTO 始動時は、クラクションなどを鳴らし周囲に合図しましょう。
★機械の調整・整備時（つまり物除去等）は必ずエンジンを止めましょう
★作業機を上げ点検する時やつまり物を除去する時は、作業機の下降を防止するため「固定脚」や「かませ木」を用い下降防止に努めましょう。
★作業機の連結時での「挟まれ」事故や「機械昇降時の落下」事故に、十分注意しましょう。

★機械の飛び降り・飛び乗りをしないようにしましょう。
★夕方や夜間に公道を走行する時は、車幅灯を取り付けましょう。
早めの合図、低速車マーク・反射シールをはるなど、
トラクタの位置や作業機の大きさを知らせるようにしましょう。
★水分と塩分をしっかりとり、熱中症に注意しましょう。